

兵庫県に生息するツキノワグマの食べもの ～え！？クマってドングリばかり食べるんじゃないの？～

有働真・三國和輝（兵庫県立大学藤木研究室）

展示の目的

来訪者にツキノワグマを取り巻く諸問題や生態への理解を深めていただくことを目的とした展示を行った。

展示内容及び発表方法

ツキノワグマは主に森林内部に生息する動物であるため、生態に関する理解が不足しているほか、実際にその姿を目撃することすらも稀である。こうした現状はツキノワグマの生態に対する一般市民の予備知識の不足を引き起こしており、発表を行う上で課題となる。本展示ブースでは食性研究の成果をポスターで解説するだけでなく、来訪者が実物の標本を見て触れる体験的な機会を提供した。体験を通して食性研究を解説することで、来訪者がクマの生態をイメージし易くした。

①近畿北部西側地域におけるツキノワグマの食性調査の結果（有働 修士論文）

日本におけるツキノワグマは一般にブナなどの落葉広葉樹が優占する山地帯に生息するが、近畿北部西側個体群のツキノワグマはカシ類など常緑広葉樹が優占する低地帯を中心に生息している個体群である。ツキノワグマはミズナラやブナの堅果を好むことが先行研究において示されているが、標高帯の違いから近畿北部西側個体群の生息する地域にはこれらの樹種がほとんど分布していない。このことから、近畿北部西側個体群のツキノワグマは一般市民が想像するようなドングリばかりを食べているというわけではなく、むしろドングリの餌資源における割合は5%以下と非常に少なくことが判明した。また、タケノコや柿の果実など人里由来の食物を多く利用していることも判明した。

②ツキノワグマ・ニホンジカ・キツネの骨格標本と毛皮の展示・接触体験

動物の形態は生息環境に対する適応を反映しており、特に頭骨からは採食生態や生前の生息環境が読み取れる。本展示ではツキノワグマ（雑食性動物）、ニホンジカ（植物食性有蹄類）、アカギツネ（動物食性動物）の頭骨の形態を比較しながら、ツキノワグマの餌環境に対する形態的な適応を解説した。また、毛皮や頭骨に直接見て触れてもらうことで普段目にする事のないツキノワグマの姿をイメージしていただいた。それに加えて、セメント質年齢推定法や、体毛の安定同位体分析など近年頻繁に用いられるようになった研究の解説も行った。

③ツキノワグマの食痕サンプル・痕跡写真の展示

クマ類の痕跡は生息地を探索したところで簡単に発見できるものではなく、実際に目にした経験のある人は少ない。本展示では痕跡の写真やツキノワグマが果実の採食時に折った枝や糞のプラスチック標本を展示した。糞のプラスチック標本は提供者のご厚意で来訪者に直接触れていただいた。

来訪者からの反響

知られざるツキノワグマの生態を知った来訪者からは感嘆の声が聞かれた。意外にも実際に頭骨に触れる方は少なく、接触体験では毛皮の方が人気だった。ツキノワグマの頭骨には大型の犬歯があるため、怖がる来訪者の声が聞かれた。今後の発表の参考にしたい。来訪者の中には発表内容に関心があるだけでなく、2023年におけるツキノワグマの大量出沒に関して発表者に意見を求める方が多かった。ツキノワグマの出沒メカニズムは発表済みの知見では十分に説明できないため、検証されていない仮説を交えて解説した。今後更なる研究が必要だ。また、館内ツアーのガイドの方からお声掛けくださり、ツアー内においてプラスティネーション標本に触れて頂きながらツキノワグマの食性について説明する機会を頂いた。その際には、多くのツアー参加者にクマの食べ物に興味をもっていただけた。



写真 1 発表の様子（発表者：有働）

発表の成果

クマの生態は謎が多いうえに昨年の大量出沒で世論の注目が高まり、マスメディアで特集が生まれ、多くの有識者がコメントを発信した。一方で、断片的な知見や数少ない生きたクマ類の映像が無秩序に流布され、クマ類の生態について体系的な知識のない方々は錯綜する情報に混乱したと考えられる。本展示はこうした現状を打開するにはあまりにも小規模であるが、来訪者と直接対談することでクマ類の有識者が発信するべき要点に気づかせてくれる。今後もクマ類の分布拡大により、ヒトとの軋轢は高まると予想される。現代の研究者には一般向けに理解しやすい情報発信を行うスキルが必要だと感じた。

謝辞

本展示では兵庫県森林動物研究センター、人と自然の博物館の皆様にはツキノワグマの骨格標本及び毛皮、クマ糞のプラスティネーション標本を借用して頂きました。この場を借りて、感謝の意を表します。